

角のたばこ屋は藤に覆われていて毎年見事な花が咲いたが、よく見るとそれは二本の藤が絡まり合っていて、一つはある日家の前に置かれていたということを、今は誰も知らない

角のたばこ屋は、見事な藤に覆われていた。

毎年ちやうど五月の連休のころに、いつせいに花が咲いた。紫色の小さな花をびっしりとつけた房が長く下がり、その一面が急に明るくなった。

今は、木戸が閉まったままだが、いつかは開いていた。向かいにマンションが建った当時は、たばこの自動販売機が稼働していたし、その横の窓の奥に人がいた。

もっとずっと昔、周りにまだ畑がたくさん残っていて、隣の豆腐屋が朝暗いうちから豆を煮るにおいを漂わせていたころは、たばこ屋から娘が出てきて、小学校に通っていた。娘はいつも、次の角で同級生三人と待ち合わせていた。途中の家にいる大きな甲斐犬に吠えられるのが怖くて、ときどき遠回りをした。甲斐犬は門の内側にいたが、立ち上がって門の上に前足をかけていることさえあり、今にも飛び出してくるのではないかと、娘はいつも怖ろしかった。娘が学校を卒業するころに、犬はいなくなった。その半年ほど前から、玄関に寝そべってばかりだった。それでも、娘たちが通ると頭を起こして吠え立てたのを、娘はずっと覚えていた。

その娘が生まれたころには、藤は漬物用のプラスチック樽に植え替えられて、たばこ屋のテントの縁をようやく這いだしたという具合だった。そのころのたばこ屋は、自動販売機ではなくガラスケースの上の窓からたばこを買う客が多かった。たばこ屋の店内にも、週刊誌、駄菓子、洗剤などが置いてあった。近所の子供たちが、店の中で菓子を食べるための丸椅子が並んでいたことも、しばらくあった。そこに毎日のように来ていた体の小さい男の子は、バス停の前のアパートに住んでいた。父親はおらず、母親が一人で働いて育てていた。

男の子の母親は、たばこ屋の窓にいつもいたおかみさんの遠縁だった。だから、母親が仕事で遅くなって行くところがないときはあのだばこ屋にいなさいと、母親は息子に言っていた。おかみさんは、その男の子に宿題はあるのかとか給食はなんだったのかと話しかけたが、男の子はほとんどしゃべらず、漫画をひたすら読んでいた。男の子が五年生になったときに母親は体調を崩し、男の子は親戚に引き取られるとかで引っ越していった。最後に男の子がたばこ屋に来た日、来る途中の家に黒い子熊みたいな子犬がつながれているのを見た。

たばこ屋の建物を建てたのは、おかみさんの夫の父親だった。若いころ大工をしていてその後も建設現場を手伝うことが多かったし、前に住んでいた家も自分で建てた。

建てて一年後、夫の父親が訪ねてきた。路面電車で二十分ほどの距離に住んでおり、夫の父親の勤め先と家との中間にたばこ屋はあったから、週に一度は立ち寄っていたのだが、その日はめずらしく日曜の朝からやってきた。越していった近所の人が置いていった、と鉢植

えを持ってきた。藤だと父親は言うものの、冬で花も葉もなく、頼りない枝が伸びているだけで、ほんとうにこれに紫色のかんざしの飾りのような花がつくとは、あまり想像がつかなかった。父親と夫は酒を飲み、庭がないから藤棚は作れない、店の軒に這わせたらいいのでは、と話したが、そんなになるまでには長くかかりそうだった。おかみさんはそのころは若かった。

たばこ屋は、すぐ近所に住んでいた親戚から商売を譲ってもらった。おかみさんと、のちには娘もいっしょに店を切り盛りした。

「この辺で、倉本さんというお宅を知りませんか？」

夏の暑い日に、アメリカ産のたばこを買った男が尋ねた。白いシャツに麦わら帽をかぶった、背の高い中年男だった。

「さあねえ？ あんた、知ってる？」

奥にいた娘も首を振った。

「昔、大変お世話になりました。確かこのあたりだったはずなんです、見つからなくて」

男は、門に松の植わった立派な家なのだと説明したが、思い当たるところはなかった。

「このあたりもずいぶん変わったそうですから。お隣のお豆腐屋さんは、うちより前からあるのでご存じかも」

十年前までは畑しかなくて、と近所の人たちがよく話していた。養鶏場もあったらしい。たばこ屋の土地も、建つ前は菜っ葉が植わっていた。

男は納得がいかないように周りを見回していたが、テントを半分覆うように育っていた藤に気づいた。夏で、黄緑の葉が勢いよく伸びていた。

「やあ、これは立派な藤だなあ。花が咲いているときに見たいもんですね」

「そうなんです。たいした手入れもしてないのに、すごいんですよ、花の時期はのれんみたいになって」

「そうでしょうなあ。いや、羨ましい。うちは団地の狭いベランダだから」

男は、やたらと藤をほめ、思い出したように切手も買ってしまった。

「この藤は、きつとすごい花をつけるようになりますよ」

あとで、おかみさんは、隣の豆腐屋に倉本という家があったのか聞いてみた。豆腐屋は、裏の今はアパートが二棟ある一画がそうだと聞いた。昔は大きな家だったが会社が傾いて莫大な借金を作り一家は姿を消した、麦わら帽子の男はうちにも来たがなんとなく怪しい、探偵に違いない、などと豆腐屋は妙に強い調子で断言した。

一週間後、朝、夫が工場への勤めに出ようとすると、表に植木鉢が置いてあった。テントまで伸びる藤と同じ葉がついていた。忘れ物とも思えないが、気味が悪いのでしばらく表に置いておいたが、取りに来る人はいなかったし、置いた者を見たという人も現れなかった。おかみさんは、ついでに、と家の藤と同じように水をやっていたら、翌年の季節には花が咲いた。家の藤と、まったく同じ色だった。おかみさんも娘も、あの麦わら帽子の男を思い出したが、男はあれ以来二度と姿を見せなかった。二つ目の藤も順調に伸び、そのうちに、ど

これからどこまでがどちらの木かわからなくなった。

娘は二十六で結婚して隣町へ移り、夫は工場を定年退職して十年後に死んだ。そのあともおかみさんは一人でたばこ屋を続けた。たいてい一日中、ガラスケースをしつらえた窓の内側に座っていた。そばに小さなテレビが置いてあって、熱心に見ているわけではないがいつもつけてあった。店の入り口は閉めて、代わりに自動販売機が三つ並べてあった。

角を曲がった先の戸建てに住む会社員は、その光景を覚えていた。引っ越してきたばかりのころはまだたばこをやめていなかったから、普段は駅前のコンビニで買っていたが、このたばこ屋でもときどき買った。自動販売機でボタンを押してから取り出すまでの間に、必ずちらっと中にいるばあさんの姿を見た。いつも横を向いていたから、どんな顔だったのかは思い出せない。テレビのニュースを読み上げるアナウンサーの声が、よく聞こえていた。

藤の咲く時期は短い。

通りかかって、もうすぐ咲きそうと思っていたら、突然紫色のカーテンに出くわす。今は通勤途中だから、土曜日に写真を撮りに来よう、と思っていたと、もう色褪せている。そして葉も落ちた冬の間は、そこに美しい藤があることも忘れてしまう。

あるとき、紫色だった藤の花が、白くなった。真っ白い花の房がいくつも垂れ下がって、遠くからでもよく見えた。こんなところにこんな花があったかな、と通りかかった人たちは思った。

次の五月、その角にはたばこ屋だった建物も藤もなかった。

柴崎友香「角のたばこ屋は藤に覆われていて毎年見事な花が咲いたが、よく見るとそれは二本の藤が絡まり合っていて、一つはある日家の前に置かれていたということを、今は誰も知らない」
（『百年と一日』筑摩書房、所収）

※底本は柴崎友香『百年と一日』（筑摩書房、2020年初版）を用いた。